

歴博 くらしの植物苑だより

第115回くらしの植物苑観察会 10月25日(土)

衣服と植物

澤田 和人(本館研究部)

1 東アジアの木綿

東アジアにおける木綿の本格的な栽培は、それほど古くには遡りません。まずは、中国において、14世紀末葉から15世紀初葉ころから始まり、ややおくれで朝鮮に導入されました。それからさらにおくれることおよそ1世紀、ようやく日本に導入されたと言われています。日本で木綿の栽培が広範に行われるようになったのは、江戸時代以降のことになります。

つまり、室町・桃山時代の日本においては、木綿は貴重品でした。残念ながら、当時の木綿布の実作例は、日本にはほとんど伝存していないと言っても良いでしょう。ただし、木綿糸を用いた交織は、しばしば見られます。黄緞と呼ばれる裂地がそれに当たります。黄緞とは錦の一種で、普通、地経に絹、地緯に木綿を使って織り上げています。日本に伝来している黄緞は、まずは中国で生産されたものと考えて大過ありません。そして、戦国武将の遺品に例を多く見られ、武将たちが中国舶載品として珍重していた様子が窺えます。今日感覚からすると、木綿を絹に混ぜ込んで錦をつくったり、それを喜ぶことは、不思議に思われることでしょう。しかし、木綿が貴重品であった当時からすると、何も不思議なことではありません。

2 日本の木綿布と外国の木綿布

木綿の繊維は一本一本が短い短繊維です。そのため、糸をつくるには、強い撚をかけて合わせていく必要があります。撚り方には二通りあります。右撚をかけて、糸の側面から見た撚の方向が左上がりになっているものを、アルファベットのSの字形になぞらえて、S撚と言います。そして、左撚をかけて、糸の側面から見た撚の方向が右上がりになっているものを、Z撚と言います。

撚の方向には、民族的・文化的な習慣が色濃く映し出されている場合があります。江戸時代の日本の木綿布も、その格好の例となる可能性が高いと思われます。

江戸時代の日本の木綿布を見ると、経糸・緯糸ともにS撚となっている例がほとんどです。それに対し、ヨーロッパ更紗など、西洋から舶載された木綿布を見ると、経糸・緯糸ともにZ撚であったり、一方がZ撚でもう一方がS撚であったりと、Z撚を多用しています。近代に入ると、日本の木綿布でもZ撚が多用されるようになります。これは、西洋から紡績の機械・技術を導入した結果と考えられます。

なお、江戸時代の日本の木綿布と同時代の西洋の木綿布を比べると、日本の方が糸が随分と太くなっています。紡績技術の違いだけでなく、本質的に、日本と西洋とは、普及していた木綿のタイプに相違があったためです。西洋に普及していた綿は、日本の綿よりも繊維が長いものでした。そのため、物理的により細く糸を紡ぐことが可能でした。

3 植物繊維と動物繊維

江戸時代の木綿布は、大抵は平織です。絹に見られるような複雑な織り方はなされていません。長繊維である絹糸のように細い糸をつくることができない、ということも無関係ではありませんが、伸張性が大きく関係しています。絹糸は伸張性に非常に優れています。機織りでは経糸に強い張力がかかります。複雑な織物では、張力が一層強くなります。短繊維や伸張性のない糸であると、抜けたり切れたりしてしまいます。手紡ぎの木綿糸で絹糸と同様の複雑な織物を織ることは、物理的に不可能です。

同じ繊維といっても、木綿や麻などの植物繊維と絹などの動物繊維とでは、性質に大きな相違があります。織り方だけでなく、染め方にも相違が出てきます。染料によってはどちらか一方にしか染まらないものがあったり、染め方を変える必要があるものもあります。かつては、藍による染色もその一つでした。

藍による伝統的な染色法と言え、建染であるというイメージがあるかも知れません。藍の建染は植物繊維と親和性が非常に良いものですが、絹（動物繊維）とはあまり親和性が良いとは言えません。16世紀以前では、絹を藍で、特に薄い色で染めるときには、建染よりもむしろ生葉染で染める方が、一般的であった可能性が高いことが、当時の語彙から知られます。



日本の木綿



ヨーロッパの木綿

次回予告

第116回くらしの植物苑観察会 2008年11月22日(土)

「古典菊の品種の特徴と大名庭園の菊作り」

小笠原 亮 (伝統園芸研究家)

13:30~15:30 (予定) 苑内休憩所集合 申込不要 要入苑料